



八戸ロータリークラブ レター

年度末号 2021.6.30

会員の皆さま、2020-21 ロータリー年度の活動、お疲れさまでした。

新ロータリー年度が素晴らしい1年になりますよう、願いを込めて

八戸ロータリークラブ レター 年度末号を発行しました。

テーマは「**道尻年度を振り返って**」です。どうぞご覧ください！

(順不同・敬称略)

「ロータリーは あの手この手」

道尻 誠助

振り返ってみると、今年度はコロナ禍による急激な社会変化に柔軟な対応が求められる中で「会員の健康と安全を守り、創意工夫を凝らして例会や行動を継続すること」を最大の課題として取り組んだ1年でした。徹底した感染防止対策に皆さまのご理解を得て会員一丸となって取り組んだ結果、特別例会はお月見例会のみの開催となりましたが、通常例会は1回も中止することなく開催することができました。皆さまのご協力に感謝申し上げます。

次に、心に残る地味ではありますが素晴らしい奉仕活動のご紹介をさせていただきます。親睦・会場委員会 ICT 担当チームのご努力により、WEB を用いた例会オンラインシステムが構築され、双方向性参加型のハイブリット例会ができるようになりました。これにより例会への参加方法の選択肢が広がり、諸事情により通常例会に参加できない会員を救う朗報となりました。先導の大役を務められた奈良全洋さんと ICT 担当チームの皆さまに感謝申し上げます。

次に、会報に多くの写真を盛り込み読む人の目をくぎ付けにする紙面に刷新し、内容も会員の近況報告、雑感、自ら奉仕活動に積極的に参加し取材、執筆、編集をされました。そして、会報と2度にわたるクラブレターの発行は会員相互のロータリーファミリーの思いやりの心の醸成に貢献大となりました。さらに、臨場感あふれるホームページの制作と迅速な更新にも取り組まれ、コロナ禍の私たちに一服の安らぎを与えてくれました。孤軍奮闘奉仕活動を継続された会報・広報委員長の広瀬知明さんに感謝申し上げます。

次は、「八戸ロータリークラブの周年記念事業、社会奉仕事業の現場を訪ねて」についてです。令和の弥次喜多道中に同行いただいた方は、八戸ロータリークラブ

「知」の巨人として知る人ぞ知る、江戸時代より続く旧家「大丸屋」現当主の石橋信雄さんでした。歴史探訪にふさわしく「馬」を用立てようと算段しましたが、先客ありとのことでうまくいかず車で回ることになりました。フットワークの軽さが取柄の2人の珍道中は4月22日の午後晴天決行。（実はその日は私の結婚記念日でした）まずは南郷区青葉湖の一望できる世増ダム完成記念植樹地を目指すことになりました。行け行けどんどん。耕運機免許取得から53年の私の運転でいざ出発。助手席の信雄さんは腹をゆらしながら耐えているようだったので、歌でも歌って元気付けようとしたところ、「上手な歌を聴くとめまいがしてくるので」とやんわりNGに。民謡歌手として失職中の私の素性がバレてたのかと妙に納得し、気を取り直しゴールまで安全運転に心掛けることになり、旅の終わりには2人の頭上にチョンマゲまで生えるというおまけ付きとなりました。

ロータリーは何も考えずに楽しむところ。そして無心になれるところです。縁あって巡り会った会員との交流は私たちを大きく育ててくれます。かけがえのない目には見えない大切なものを与えてくれた皆さまに感謝申し上げます。

智

言葉で動く人

念いで動く人

人間の二本柱

「道尻年度、もう終わりかぁ」

佐々木 泰宏

なんか、何もしないうちに終わってしまった1年でした。

高齢者の仲間入りをし、「今のうちにあれもしなくちゃ、これもしなくちゃ」と妙に焦っている自分を感じています。悪あがきでしょうか？

心では決して老境ではないと思っているのですが、人生終盤に差し掛かっているのは間違いないわけですから…。

そうそう、私が抱えている数ある持病に、さらに新米が加わりました。“腰椎すべり症”です。ゴルフのスイングには、あまり影響しないのが不幸中の幸いですが。

最近、良いことが二つありました。

一つ目はかわいいかわいい初孫が生まれたこと。

二つ目は、新年の抱負通り水曜会でのタイトルが取れたこと。こうなったら年間王者を目指します！

「自分に克つことは難しい？」

村井 達

2020-21 道尻誠助会長年度が終わります。Covid-19 真っただ中年度、前例のない年度でした。

正面向かって左 M テーブル。道尻会長、紺野幹事、深澤副幹事、村上会場監督。薬学・医学の大御所方でした。誠に「対コロナ布陣内閣」でありました。

会長の巧みで傑作な「シャレ」（駄洒落?）。スキンシップが困難な With Corona の例会が続いたのですが、コロナ禍を克服するにふさわしい楽しみで有意義な毎週の例会。文字通り“See You Next Week”でありました。感謝感謝！

そこで、パストガバナー 否 「パストバカナー（馬鹿な一）」のお粗末な洒落を一席。

40 年ぐらい昔、当時小学生の三男に説教した場面

「自分の最大の敵は自分自身だ。自分に勝たなければならないぞ」（村井達）

「エッ！ それは大変だ。相手が強すぎる」（三男・佑史）

「……………??？」（村井達）

確かに自分に克つことは難しい。克己とはいかにすればよいのか？

彼の言葉が大いに参考になりました。自分が勝てないほど、自分自身が強いのは大いに結構。その強い自分自身の「目を向ける方向」を少し変えれば、実に強力な自分に変身する可能性がある。もしかしたら、相手、すなわちもう一人の自分とは、いつも主観的な自分をどこかで客観的に見ていて、何かを気付かせてくれる存在なのかもしれない。つまりは「発想の転換を、自分自身で自然にやってしまう」ということではないか？

ドイツの哲学者ニーチェは「勇気を出して自分を信ずることだ」と言っています。自分より強い自分自身をやっつけるためには勇気が必要。自分の考えと目的を明確に持ち、その達成のために勇気を持ち、自己を信頼して進めば自分に克てる、という意味らしい。

難しい哲学は別として、自分に克つコツは、まず他人の目から自分を見る。「克己への発想の転換」、そして「自分自身に挑戦する勇気と自己信頼」であろうと思います。

地球規模でニューノーマルになるだろうと言われるアフターコロナへの個人の変革！ 変革や挑戦とは本来、期待を胸に楽しいものであるはず。相手も強いが、自分はずっと強くなる。やるべき内容も前向きのことですから、克己は楽しいことであるはず…なのです。新たな時代の世界のロータリーに期待して。

齢 80。未だに自分を克服できない後期高齢者オイタリアンの迷言でした。

やはり「パストバカナー」だ。

「言行はこれに照らしてから」

鶴飼 寿栄

長い感謝の嵐、会長年度末総括報告の一場面。会員一人一人の名前を丁寧に読み上げている。時間つぶしの作戦か、はたまた途中煙にまかれるのでは、と集中していると味の悪い食事となってしまった。どうやら何事もなく全員の名簿を読み上げたのに少々ガツカリしながら、1人だけ名簿から名前が漏れているのに気付いた。それは紛れもなく会長である道尻氏本人の名前であり、道義的にも自分に感謝することはタブーかもしれないが、名簿順に棒読みしたらもしかしたら、という期待感もあったが、アッサリ裏切られた。

とはいうものの、自らの評価は避けたが、この1年間の活動はコロナ禍の中で必死に光をともし、不安を払拭する明るさを演出してきたのではないか。まさにそれは世相に合った道尻流であり、氏独特のスタイルであったと思う。

会長就任間もなく、道尻氏はこんな言葉を私に投げかけてきた。四つのテストのことである。「真実かどうか私は自信ないけれど、それでも会長が務められるのだろうか」「みんなに公平というのはいり得るだろうか」と。私は「それはテストであり、点数は自分で上げていくことがテーマではないのか」と真面目に答えたが、それがクスリになったかどうか…。

この四つのテストに似たものが日本版の「三方良し」、またガンジーの「七つの大罪」がある。これらは人の道としてエスコートしているものだと思うが、ロータリーの四つのテストだけにしか存在しないものがある。それは「言行はこれに照らしてから」で、これこそが自分のレベルを表すものだと思う。

前原会員のジョークに「毒にも薬にもならない」というのがあるが、これは薬屋のことではなく、この四つのテストに例えるなら、四つのテーマは毒であり言行の部分はクスリと言うことかもしれない。

そんな折、さりげなく額に納めた四つのテストを会員に配布する行動も粋な計らいであり、感謝するものの、その根拠に真実かどうかと迷うが、内面的な活動をせざるを得ない中、ユーモラスな例会は平和的で出席率に大きく貢献したのではないか。そして、自ら自分をほめることは遠慮したとしても、その貢献度は間違っ感謝の名簿に自分の名前を加えるだけの価値は当然と言えるのではないか。

道尻会長、ご苦労さまでした。そしてありがとうございました。

「コロナ禍に思う」

高谷 勝義

北海道、大好き人間の高谷です。

連日朝夕のニュースのトップは新型コロナウイルス感染状況から始まり、いささか食傷気味ですが、ここに来て人口 10 万人当たりの感染者数が多いのは青森県が東北で 1 番とのこと。食傷気味なんて言っていられなくなってしまいました。北海道に至っては、2 度目の緊急事態宣言が発出されて完全に第 4 波の襲来です。

5 月半ばの朝日新聞天声人語に「地球は 46 億年前に誕生した。ウイルスが生まれたのは 30 億年前。人類にはまだ 20 万年の歴史しかない。もし地球全史を 1 年に圧縮すれば、ウイルスは 5 月生まれ、人類は大みそかの夜 11 時 37 分に生まれたばかりとなる」とあり、興味深く拝見しました。「ウイルスは人類よりも個性豊かで、不器用なものも器用なものもあります」とは、ウイルス学の泰斗で 1950 年代に冷凍保存のいらないワクチンをつくり、天然痘根絶に貢献された山内一也東京大名誉教授のお言葉だそうです。

かつての日本は、前述のごとくワクチンの開発国として名をはせていましたが、1970 年代以降、予防接種禍の集団訴訟で国が敗訴して以来、及び腰になっているのが実情のようです。これで良いものだろうか？良いはずがない。かつて某政党が政権与党になった際の事業査定の際、「なぜ 2 番ではいけないのですか？ 1 番でなくとも良いのでは？」とのやりとりをご記憶の方もおられると思います。ゴルフの松山秀樹選手が今年のマスターズで見事に優勝した背景にあるのは、タイガー・ウッズ選手の活躍に刺激を受け 1 番を目指して精進に精進を重ねた結果でした。優勝インタビューで「子どもたちがこれを見て、後に続いてくれたらうれしい」。1 番を目標に努力しやり遂げた者しか言えない発言で心を打たれました。

国の令和 2 年度第 2 次補正で予算化された新型コロナウイルス感染症対策関係経費は、31 兆 8 千億円余。第 3 次補正額と令和 3 年度予算を合わせればとてつもない額になります。これまでにノーベル賞を受賞した日本人は 28 人おられます。そのうち、物理学・化学・生理学・医学部門の受賞者は 24 人。受賞者の多くが大学教授などの研究者ですが、民間企業の技術者の方もおられる。共通事項は、基礎研究、応用研究に明け暮れていること。そうした地道な毎日の研究の中で「ひらめき」があるといいます。この「ひらめき」を求めて研究に没頭しているのかもしれないと思うとワクワクしてくる自分がいます。

自然科学分野での論文数で中国が米国を抜き初めて世界1位になったとの報道で衝撃を受けたお方もあるのでは。日本は3位から4位に順位を落としましたが、論文数自体は6万本で変化なく推移する中で、中国は8万本台から一挙に30万本台になったとのこと。国の姿勢と言えはそれきりですが、昨今の新型コロナウイルス感染症対策費のほんの一部でも恒久的な財源を見出し研究者に助成できないものかと思っています。国土と国民を守るための防衛費が5兆円を超えましたが、研究者を長い目で大事にするということは、ある意味において国民の生命と財産を守ることにつながると思います。日本には資源がありませんが、「人」という資源がたくさんあることに国は早く気づき早急にそのための対策を講じてほしいものだと感じています。ワクチン開発で出遅れたものの、治療薬の開発で世界に貢献できたとすれば、子どもたちの目が一段と輝いて見えるはずですよ。

議論されている「こども庁」設置の大きな目的には、日本の将来を担う子どもたちに大きな夢を持たせることもあると思いますが、間違いでしょうか。

(記：2021年6月1日)

「道尻年度を振り返って」

夏川戸 齊

道尻会長は、誰もが知るダジャレ会長でした。毎回のように話をするダジャレを楽しみに、いつどのようなダジャレが飛び出すのか聞き耳を立てていました。

今年度、私はロータリーの友委員長を仰せつかり、特段力になれたのか反省をしているところです。しかしながら、入会歴の浅い方に友の紹介をしてもらうよう会長から指針を頂き、発表者の成長につながったと感じていますし、友を読む会員が私を含め若干なりとも増えたのではと感じています。私自身、隅から隅まで読んだのは初めてで、おかげさまで私自身が少しは成長できたのかなと感謝しています。

アイデアマンで穏やかな話し方と優しい顔立ちが素敵な会長でした。今後とも私に面白いダジャレを聞かせてください。期待しています。

道尻会長、1年間お疲れさまでした。

「今年度のいいかげんな雑感話」

橋本 八右衛門

昨年度に幹事年が終わりまして、下野してすっきり解放された気分でスタートした今年度でございましたが、コロナ禍でこんなにもさまざまなことがキャンセルになり、その開放感を味わうどころでないこの1年は非常に特殊で大変な年度だったと思います。頑張っていたいただいた道尻会長をはじめとした執行部の皆さまには声を大にして「お疲れさま！」と感謝申し上げたく思います。

そのような中でも、「温故知新」をテーマに、普段はあまり卓話されない歴史ある会員の皆さまのお話を聞くこともできましたし、オンラインで例会参加もできるようになったりと印象深いこともありました。

残念だったのは、やはり主要な目的である親交を深めるクラブ内外を含めた「交流」ができなかったこと。大勢が参加するような形を自粛せざるを得ず、基隆 RC とはもちろんのこと、国内の横手、能代 RC とともに何もできませんでした。自身の委員会が姉妹・友好クラブだったことをつい前日、「そういえば」と思い出したくらいです。もっと何かできたのではないかと反省しております。（こんなことを言えば他の皆さまに怒られるかもですが、めんどくさくなくてよかった？笑）もう一つ、道尻会長のダジャレに対する攻めの姿勢が後半見られなくなってしまったこと。散々あおったりしてみたのですが、完全に守りに入られてしまった…。ただその分？会長のいつもの笑顔が次第に復活してきたのでよかったかもしれません。

1月のレターでは「スキーを頑張る」と個人的な目標を立てていました。これはなんとか有言実行。毎週のように意地で行きまくることができ、12月下旬から3月中旬まで体を痛めることもなく（といっても筋肉痛は常でしたが）完走。これは雪も早めに降ってくれたことと、いつもの八幡平リゾート、奥中山高原スキー場に加えて、安比高原スキー場の魅力に目覚めたことも大きかったと思います。今までリフト券の値段が高いイメージがあったり、ちょっと広すぎる感じがしてなかなか足を伸ばさなかったのですが、行ってみたら見事にハマリ土日連日通った週末もあたりしました。ネットで事前購入、ICカードでリフトゲート通過というのも慣れてみたら便利なもので、さらに集客のためでしょうか、他スキー場と同じぐらいの金額設定などなど。皆さまもぜひ夏場のゴルフだけではなく、冬のスキーもいかがでしょうか？ ただそれだけ通ったにもかかわらず、家族と行ったのはほんの2回程度。ますます“ぼっちスキー”に磨きがかかってまいりました（笑）

次年度は社会奉仕委員長という立場で、運営の一端に参加させていただくことになっています。それはそれで頑張るまいりますが、私の命題は「懇親会」の早期復活！今年度の飲み会は感染予防の観点から見事に中止、中止の嵐。気持ちも商売もただただ落ち込んでいくばかりでありました。このままではいけません。ウィズコロナ、公式の懇親会を大手を振って開催する、できるような八戸 RC の雰囲気づくりにまい進していきたいと思えます。まずは気持ちから！ 飲みましょう！ 懇親会やりましょう！

「See you next week! に込められた道尻会長の思い」

正部家 光彦

この1年間、毎回の例会を締めくくる道尻会長の言葉は「See you next week! また来週も会いましょう!」でした。

「詩人」である道尻氏がなぜこの言葉を選んだのかと考えた時に、きっと次のような温かな深い「祈り」があるのではないかと、私は考えています。

『次の週まで、どうかお健やかに、お幸せにお暮しくください。時に人生はうまくいくときばかりではありません。病気になることもあるし、何をやってもダメなときもあります。どうか会員皆さんが、明日も元気に無事に、そして来週もまた参加してくださいますように…』

さらには、道尻会長の大きな願いは、「来週」にとどまらず「永遠」に、「会員」にとどまらず「全世界の人々」の安寧（平穏で心安らかなさま）と平和な生活を祈っているのだと思います。これぞまさにロータリー精神そのものと合致するものであらうと考えます。

道尻会長の下、この1年間、青少年奉仕委員会委員長として、伸び伸びと活動させていただきました。

結びに、道尻会長に感謝とねぎらいの気持ちを込めて、なぞかけを二つお贈りします。

①「薬剤師」とかけまして、「走り幅跳びの選手」と解きます。

そのころは、どちらも「ちょうやく（調薬・跳躍）が得意です」

②「道尻誠助会長」とかけまして、「夏祭りの夜店の提灯」と解きます。

そのころは、どちらも「でんとう（伝統・電灯）がつながり、明るいでしょう」

どうぞこれからもさまざまな面でお世話になります。どうぞよろしく願います。

「道尻年度を振り返って」

田部 久貴

5月27日から東京での勤務となり、新しい職場から送らせていただいております。既に退会しておりますが、最後のレターとして参加させていただきたいと存じます。

「道尻年度を振り返って」となりますと、私はやっぱりローターアクトの委員長をやらせていただいたことが一番です。ローターアクト委員長としての最初の仕事は卓話でして、金融の話をしようと思ったら、直属の部下から「そんな面白くない話はやめてくれ」と言われてしまい、「20代でやるべきこと」と題して恋愛の話をしました。ややスベリましたが、良い思い出です。

その後、蕪嶋のすす払いや VISIT はちのへ勉強会などを通じて、緊張しながらも一生懸命に取り組むローターアクターの姿勢に私自身も刺激を受けました。また、主に正部家さんと一緒に行った小菊荘の学習支援では、金融のシミュレーションゲームを3度やらせていただき、目を輝かせて取り組む子どもたちを見て、金融教育の重要性や可能性について私自身が勉強させていただきました。

ローターアクトの活動は、弊社の若手社員にとって社外の地元友人をつくる機会であり、リーダーシップや自主性を勉強する場となっております。コロナが落ち着きましたら、ぜひ皆さんの会社の若手社員にも参加していただき、もう少し大きな組織として活動することができればさらなる成長につながると考えております。中途半端な形で転職になってしまい、大変申し訳なく思いますが、八戸ローターアクトの活躍を陰ながら応援しております。

もう一つの思い出は歩こう会です。なぜかという、今、携帯で写真を見ているその時の写真が多数出てきたからです。道尻会長のカッコイイ写真もありますので、欲しい方がいらっしゃいましたらご連絡ください。山の紅葉を見ながら結構な距離を歩き、心も体もきれいになった後のアルコール会が最高でした。

なかなかコロナで例会に参加できませんでしたが、時々お会いできたりお食事できたりする時に温かく迎えてくださり、皆さんにお会いできることがいつも楽しみでした。

先日、佐々木さんより、高知に遊びに行きたいというリクエストをいただきましたので、仕事が一段落つきましたら、本当に企画しようと考えております。コロナが落ち着いていることが第1条件ですが、ぜひ実現させたいと存じます。

最後になりますが、皆さまに教えていただいたことを新しい会社で発揮し、良いニュースが届けられるようにまい進いたします。

今後とも変わらぬご指導を賜れますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

「2年目の八戸ライフ」

奈良 全洋

こんにちは。奈良です。皆さまには、いつも大変お世話になっており、ありがとうございます。八戸に来て今日（2021年6月30日）でちょうど丸2年になります。この1年の間に65周年記念や地区研修・協議会（DTA）などの貴重な体験をさせていただくことができました。また、ゴルフや小菊荘花壇整備、種差海岸清掃活動など楽しい体験をさせていただき、ありがとうございました。今後も可能なかぎり参加させていただきたいと思います。

八戸で過ごした2年目を振り返って、一言で表すと「変化」の1年でした。まず一つ目の変化は、家族との会話が増えたことです。千葉の自宅には1年半、帰れていません。でもその分、電話で話すことが増えました。これまでの単身赴任生活では、ほとんど家族と電話することはありませんでした。でも、今は2～3日に1度は電話で話しています。これがちょうど良い感じです。電話でしか話せないから、けんかすることもなく、今までより会話が増えて家庭円満です。

二つ目の変化は、「働き方」です。弊社ではリモートワークを推奨しており、私自身も在宅勤務を積極的に行っています。パソコン2台とタブレットを使って、自分の部屋からリモートで会議に参加したり、部下からの報告を聞いたり資料を見たりしています。これ自体は問題ないのですが、在宅だと資料を見ながら、つついとお菓子を食べたり、アイスを食べたり…。これが身体には良くないと分かっているのですが、その結果、持病の糖尿病が悪化してしまいました。これは、何とかしないと。

やっとワクチン接種も本格化し、コロナ収束が見えてきました。3年目になる八戸での生活をさらに有意義に楽しく過ごしたいと思います。引き続き、よろしくお願ひします。

「新人ロータリアンとしての8カ月」

平戸 昭彦

皆さま、こんにちは。東北電力の平戸です。

昨年10月、会員の皆さまには新人ロータリアンとして温かく迎え入れていただくとともに、道尻会長には入会式の際に私にバッチを着けていただきまして誠にありがとうございました。新人ロータリアンとして8カ月が経過いたしました。これまでいろいろ勉強させていただきましたし、今年5月には初めての卓話も経験させていただきました。この紙面をお借りし皆さまに感謝申し上げます。

ただ、コロナ禍での会社指示もあり、皆さまとの夜のお付き合いがなかなかできなかったことが残念です。ワクチンの接種率も上がってきており、もう少しの辛抱だと自分に言い聞かせております。そして、収束した暁には久しぶりに徹底的に飲みたいと思っております。

まだまだ新人の域を出ない私ですが、皆さまの足手まといにならないよう努力いたしてまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。水曜会でも中位ぐらいに行けるよう頑張ります…。

最後になりますが、道尻会長におかれましては、この1年会長としての大役を担っていただき、大変ありがとうございました。そして、お疲れさまでした。

「ロータリークラブレターに寄せて」

紺野 広

6月24日、当院と取引のある医療機器メーカーのうち、参加できる107社の当院担当者にお話を聞いていただいた。テーマは「長く付き合える商売上の友人関係を築くため、まずわれわれを知っていただく」である。

最近、会報・広報委員長の広瀬さんに怒られてばかりだし、ロータリークラブレターの寄稿が以前と違って思いのほか少なかったようなので、今、慌てて昨日のことを書いている。例会が継続できているから寄稿が少ないのかも知れない。せっかくのロータリークラブレター、ページ数が少ないと寂しい感じがするかもしれないので、昨日の話の内容に、関連する事柄を書いた以前の原稿を織り交ぜることとした。

さて、昨日の話であるが、内容は当院の誇れる歴史と貧乏の自慢。そして、メーカーの方々に考えていただきたいこと、当院がメーカーに対してできることを中心に、1時間ほどの時間を頂戴し、Zoomを通じ伝えさせていただいた。

赤十字、日本赤十字社、当院の歴史に関しては、当院ホームページ上に載せている病院長あいさつが今回話した歴史の要約として良いと思うので、下記にそれを転載する。

病院長挨拶

赤十字は、アンリー・デュナン（スイス人：第一回ノーベル平和賞受賞者）が提唱した「人の命を尊重し、苦しみの中にいる者は、敵味方の区別なく救う」ことを目的とし、世界191の国と地域に広がる赤十字社・赤新月社のネットワークを生かして、「人道」を基本原則の中心に据えて活動を行う、1864年に誕生した組織です。

日本赤十字社は、その中の世界最大の事業規模と人員を擁する一社であり、明治19年（1886年）に、前身であります博愛社病院が東京に設立されたのが始まりで、1877年、西南戦争における負傷者救護で初めての活動を行って以来、国内外における災害救護をはじめとし、苦しむ人を救うために幅広い分野で活動しています。

八戸赤十字病院は、昭和18年8月1日、第二次世界大戦中に開設されました。終戦間際には、自院も空襲を受ける最中、手を休める事なく、医師、看護師や、育成の途中にあった看護学生1・2年生までもが、爆撃により受傷した傷病者の手術や処置にあたりました。また、その時に、大量の傷病者が一度に入院したことにより食料問題が発生致しましたが、それを解決する為に、大湊まで出向いて、海軍の長官と直接の交渉を行って食料を確保し、自院まで自分達で搬送することにより、入院患者を守り通しました。終戦直後には、国全体が混乱し困窮を極めていた中、無医村無料巡回診療を行ない、加えて、生活保護者の診療にもあたっております。戦中戦後を通じ、人道の理念を具現化する活動を行ってまいりました。

その後も、度重なる洪水や地震により当院の建物自体に甚大な損壊を被り、病院存続の危機を何度も迎えますが、粘り強く、本来の使命であります地域医療、救急・災害医療活動を継続し、そのことに対する評価と温かい支持、御支援を受けて、それらの危機を乗り越えてまいりました。

現在は、2度の移転を経て、免震機能を有す本館と耐震機能を有す別館の2棟で、434床の病床を有する総合病院として、急性期医療、高度先進医療を、入院を中心に据えて提供しております。

私達は、これからも、赤十字病院として、赤十字の理念や赤十字思想の実践を通じて、先人の志ざしを受け継ぎ、災害拠点病院、八戸市救急医療施設病院群輪番制病院（救急告示病院）、地域医療支援病院の使命を果たし、医療の面から地域に貢献することに努め、地域の皆様と一緒に歩んでまいります。

平成31年4月

院長 紺野 広

病院長になった時に書いたものであるが、早いもので2年少々が経過したことに驚いている。院長になった当初は、薬剤耐性菌の問題が解決されずに残っていた。それを収束させて、時を置かずに新型コロナウイルス感染症が発生した。この原稿を書きながら、私の院長生活の大部分の時間が感染症対策に追われ、経営の方は流れに任せていたような気がし、少し反省している。

今、昨日の話をそのまま文章に起こしてみたが、恐ろしく長いので、やはり話の内容自体は要約する。

歴史の次に日本赤十字社の災害対応について話した。代表例として東日本大震災時の救護班の55%が当社からのものであったこと。全国の赤十字92病院は地域別に6ブロックに分けられているが、スケジュールを決め、そのブロック単位で交替しながら切れ目のない長期間の救護・支援を行ったこと。

日本赤十字社のスケールメリットが今現在、日本の災害医療・救護を支えていること。赤十字病院が減っていくことは、それが損なわれることを意味するという話を話した。

実際、一つの赤十字病院が経営難で病院を閉鎖した。対岸の火事では済まない。このことに関しては、同門会の依頼原稿に以下の通り記している。

<同門会誌「奥南」第27号寄稿>

「平成から令和へ」

八戸赤十字病院 紺野広

平成31年3月31日をもって、兵庫県丹波市にあった柏原赤十字病院が閉院となりました。柏原赤十字病院の歴史は、昭和10年4月1日、町立柏原病院が移管され、日本赤十字社兵庫支部柏原診療院として始まっております。昭和15年1月には、乙種救護看護婦養成所を併設し、戦時救護に当たる若者を育て、送り出しましたが、終戦後の昭和22年に養成所を廃止。そして、昨年度末に、地域医療を支えた84年のその歴史に幕を下ろしました。その事を知った時、柏原赤十字病院が地域医療を支えた84年という年月が、日本人の平均寿命を連想させたのか、何故かふと寂しさ感じました。人を育て上げ、世に出し、働いて、平成の最後の年に、84年の生涯を終えた様に感じられたのです。当院も、戦時中、戦時救護員育成を目的に、柏原赤十字病院から遅れる事8年の、昭和18年に、市立八戸病院から移管されて、赤十字を冠し、76年

間の歴史を刻んでまいりました。よく似た生い立ち、育ち方をしてきた病院同士であります。しかし、閉院の内情は、感傷に浸る様なものでは無く、まさしく1企業体の終焉そのものであります。全職員は、一旦解雇。柏原赤十字病院には、退職金支弁能力は無く、累積した借入金、負債の清算を含め100億円規模の支払いの全てを日本赤十字社本社が負担致しました。知っておいて頂きたいのですが、日本赤十字社が窓口となって募る義援金・海外救援金の類は、全て国内外の被災者の為に使われます。町内会や赤十字ボランティアで集められる日本赤十字社の社資は、小・中・高生を対象とした青少年赤十字への防災や奉仕の教育など、日本赤十字社が行う事業等に当てられ、各病院の経営に資する用途には、一切使われません。逆に各病院の医業収入からは、僅かな割合ではありますが、本社へ上納する制度がございます。これが日本赤十字社の内部留保資金となっています。本社内部留保資金を、今回のたった一回の閉院で、半分以上を使い切ってしまいました。もう一箇所赤十字病院が潰れ、それを清算すれば、本社の財布からは、ひっくり返しても何も出なくなります。ところが、溺れかけているギリギリの経営状態の赤十字病院は一つどころでは無く、幾つもあるのです。本社は、現在、血相を変えて、各病院の尻を叩いています。当院を含めた各病院も、それぞれに自覚し頑張っております。しかし、前記の理由から、本社は、金銭的支援を一切行いません。内部留保資金は、もしもの時の為の資金であり、もしもが、複数回起きる可能性が物凄く高いからであります。各病院に対する金銭的支援は、皆無ですが、その分、指導や教育、人的支援に関しては、他の病院群にない緊密さで、親愛の元に行われております。日本赤十字社間の人事異動には、「割愛」という言葉が使われます。当院、血液内科は、派遣元の岩手医科大学の医局員の不足により、現在診療規模の縮小を余儀無くされています。当院は大まかに申しますと、例年100億円を少し超える位の規模の収支で推移しておりますが、血液内科の収入は、当院の中では飛び抜けて多く、もし撤退となった場合には、10数億円の診療報酬が病院に入ら無い事態となります。しかし、そこにいたコメディカル、スタッフは残りますので、必然、人件費が変わらぬ支出として申し掛かってくる事になります。そのことに関し、本社を通して全赤十字病院に当院の窮状を知って頂いた所、武蔵野、京都、徳島の赤十字病院から診療応援可能との御返事を頂きました。東日本大震災や、熊本地震の時の、全組織をあげての迅速且つ継続した温かい支援活動の中で、私自身も共に働き、日本赤十字社の素晴らしさを体験致しましたが、今回の当院への支援は、日本赤十字社の組織の一員である事に、更なる誇らしい気持ちを抱かせてくれる、心に響く出来事でありました。3病院は、それぞれ、それなりの収支を計上する、日本赤十字社病院群の中では、経営的に良い方の部類に属します。しかし、一生懸命医療をし続けているからこそその結果であって、今の診療報酬制度の中、手綱を緩める余裕などある筈がありません。苦しい台所事情を抱えているのは、同じ筈であるにもかかわらず応援を申し出てくれた。その気持ちには感謝しか御座いません。市から毎年20億程の繰り入れのある公立病院や、国から年間5億程度の補填のある独立行政法人労働者健康安全機構の病院を、以前程、羨ましいと感じなくなりました。

日本赤十字社所属の医療施設は、柏原赤十字病院が令和を見ずに閉院した為、平成の時代の多くをともししてきた医療施設群は92から91となって、令和のスタートを切りました。赤十字社の人道を中心にした理念は、活動を通して発信していくもので、そこに有り続け、活動し続ける事により実を結ぶものと考えます。

私は、今年の4月1日に、日本赤十字社本社にて辞令を交付され、八戸赤十字病院第15代目の院長に就任致しました。あっという間に半年が経ちましたが、その間、東北厚生局、労働基準監督署、税務署、保健所と、立て続けに監査が入りました。慌

ただしい日々の中で、平成から令和への転換期を過ごして参りましたが、一つ一つ、指摘を受けた事を片付けながら、前に進んで行きたいと考えております。

当院が所属している DPC 群の病院は、同じ事をしていても取得した係数によって、報酬が大きく変わって参ります。機能評価係数 II には、6 項目有りますが、係数を変え、診療報酬を底上げする事は、一筋縄では行きません。効率性指数などは最たるもので、在院日数の短縮が評価されますが、その分ベッド稼働率が下がるジレンマが起こります。数字に踊らされないように、確実なものから取り組んで参ります。その点、救急医療係数は、シンプルです。入院 2 日間に手厚く診療する、医療資源を多く投入する救急医療症例が増えれば増えるほど、係数が上がって行きます。努力が、ジレンマを生ずる事無く、確実に評価されます。緊急性を有する患者に迅速にしっかりと対応する事、そして更に、地域の医療機関、圏域の患者から、信頼を受け、今以上の紹介、受療をして頂く事で、令和を邁進して行きたいと考えます。

同門会の諸先生には、日頃から温かい御指導を賜っていることに対し、この紙上を御借り致しまして、改めて心よりの感謝を申し述べさせていただきます。これからも、御指導、御鞭撻を賜ります事、また、一緒になって考え、手を取り合って共に進んで参ります事を御願い申し上げ、簡単では御座いますが、病院長就任の挨拶とさせていただきます。

これを書いた当時は当院の創立から 76 年目だったが、今当院は、77 周年中で喜寿を超えた。赤十字病院の経営は上記文中で少し触れたが、公立病院のような運営交付金、繰入金はなく、労働者健康安全機構のような政府出資金もない。民間の病院と同じで完全な独立採算である。

さて、東日本大震災時の災害対応に話を戻すが、当院も急性期に 15 班の救護班を出した事。福島県には求めに応じ、8 カ月間ほど人員を派遣した事。その後も、熊本地震をはじめ、三つのミッションにそれぞれ複数の救護班を出した事。

現在も新型コロナウイルス感染症流行により医療体制がひっ迫している大阪の医療施設に医療スタッフを交替で出している事。その他の新型コロナウイルス感染症対応も話したが、文書審議となった当院の病院運営審議会に報告したものが、昨日の新型コロナウイルス感染症対応の話と大体同じなので、それを下記に転載する。

<病院運営審議会文書審議用郵送書類>

院長挨拶

当院運営審議会委員の皆様には、日頃から篤い御指導を賜っている事に対しまして、心より感謝を申し上げます。また、今般の新型コロナウイルス感染症対応に苦慮なさりながらも、地域社会の安定を図るべく腐心されている事に対しまして、改めて敬意を表します。

先ず初めに、当院、併せて、三八 2 次医療圏の新型コロナウイルス感染症対応に関し御報告を申し上げます。

発熱者外来・PCR 検査は、八戸市救急医療施設病院群輪番制病院で、当番を決めて対応しております。青森労災病院が、月・火曜日。当院が水・木曜日。八戸市立市民病院が、金・土曜日を担当し、日曜日・祝日は、3 病院で相談して、適宜担当を決めておりますが、実態はと申しますと、年末年始 6 日間が良い例ですが、毎日保健所から依頼が来て、毎日検査対応をしておりました。域内でのクラスター発生時には求

めに応じ、担当曜日以外でも連日数十名の、ピーク時には 62 名の検査を行った日も御座いました。当院では、昨年度末、令和 2 年 2 月 21 日に、新型コロナウイルス感染症の PCR 検査を行ったのが、検査の第 1 号でした。令和 3 年 3 月 14 日迄に、計 1398 名の検査を行っております。また、PCR 検査の需要の増加を受け、八戸市からの委託で、八戸市医師会が「新型コロナウイルス検査センター」を新たに設置する事になった際には、八戸市医師会医師達への個人防護具着脱の実技指導等を含む、新型コロナウイルス感染症対応の基本講習会を開催し、更には、「新型コロナウイルス検査センター」の稼働後も、医師会スタッフが業務に慣れるまで人的支援を行わせて頂きました。

入院に関しましては、青森県から新型コロナウイルス感染症重点医療機関として三八二次医療圏で指定を受けた 2 病院。当院と八戸市立市民病院で、対応して参りました。当院では、令和 2 年 3 月 25 日に、新型コロナウイルス感染症患者の入院治療を始め、爾来、約 1 年が経過致しましたが、その間に、40 名の陽性者と 21 名の疑似症患者、計 61 名の入院治療に当たっております。当院は、精神病棟、ハイケアユニットを除きますと、一般病棟を 8 病棟有しておりますが、その内の普段 45 床として使用している 1 病棟を、新型コロナウイルス感染症用の病棟として届け出致しました。感染管理上、元々 4 人用の部屋でも、1 部屋には 1 人しか入れない方が望ましいですので、1 病棟を 16 床として運用しております。有症状者、高齢者、基礎疾患を御持ちの新型コロナウイルス感染症者を受け入れる医療機関として、ピーク時は、9 名の入院に対応致しました。ただ、1 病棟 16 名の新型コロナウイルス感染症用の病棟の届け出を行った事から、他の 7 病棟に一般診療の入院患者を寄せて入れなければならず、当院としては現在もベッドコントロールの面ではかなり大変な作業を強いられております。そんな中、救急患者を断らないという病院方針は堅持し、必要な一般診療の提供も継続して居ります。一方、圏域内の新型コロナウイルス感染症用ベッドは、簡単に飽和に至るであろうという危機感は、常に有ります。また、職員が、PCR 検査陽性の御家族等の濃厚接触者として検査を受けた事も数度に及び、院内感染、医療崩壊のリスクは、背中合わせの身近な物と感じております。

それらの危惧を打開する、新型コロナウイルス感染症制圧の第一歩として、大きな期待を寄せられているワクチンですが、3 月 17 日からは、当院職員に対する接種が始まります。政府の方針では、5 月 10 日の週末までに全医療従事者用のワクチンの配送を終了。6 月末までには、全ての高齢者向けワクチンの配送を完了するとの事ですが、その次の接種対象者である基礎疾患を有する人達に対する接種スケジュールは、未だ公表されて居りません。当院は、基本型接種施設として、当院とマッチングした連携型接種施設の 4 病院と共に接種を進めていく事となります。現在、圏域のワクチン接種は、八戸市医師会を中心に枠組み作りが進められておりますが、各医療施設・診療所での個別接種、公共施設を利用した集団接種の比率も確定に至っておらず、一部特別養護老人ホーム入所者に対する接種実施医療施設が決まっていない事、全在宅療養者に対する接種の為の方法論等の各論も、膝をつき合わせながら討議中であります。当院は、自院で接種を行わない施設の医療従事者を休日に受け入れる事、また、特別養護老人ホーム入所者や、在宅療養者に対する接種実施医療施設が決まらない時の担保として機能する事、そして、個別接種でまかないきれない方々を対象とする集団接種の運営に主体的に関わっていく事を役割として考えております。そして何より、重要視しているのは、県に求められ、受諾したアナフィラキシーを含むワクチン接種副反応対応専門医療機関としての役割です。これらは、ワクチン接種業務関連の医療行為の中でも人命に関わる最優先事項として、八戸市立市民病院と共に担って参ります。

経営に関しましては、別紙にて詳細を御報告申し上げますが、入院に関しましては、1病棟を一般診療に使用出来ない中、99.9%の達成率と、年初の目標に限りなく近いところまで持って行けております。一方、外来は、コロナウイルス禍の診療控えが原因として有るのかもしれませんが、89.6%の達成率と低調で推移しております。但し、救急に関しましては、八戸市立市民病院、救命センター対応者を除くと、その他の各診療科の医師1人当たりの救急患者受入数は、大多数の科において圏域内で一番であり、胸を張って誇って良い事と自負しております。

今、病院会計課と、次年度の経営目標を検討しております。職員皆が、経営概況を理解して、共に考えて貰う為に、分かり易く、達成可能な稼働額、ベッド稼働率のラインを、今年度の状況を元に試算して、周知致します。我々の病院の基本理念は、「私たちは、地域の皆様の生命と健康を守るため、赤十字の理念にもとづいた信頼される医療を実践し、“あなたの病院、わたしの病院、そして私たちの病院”として、誇れる病院づくりに最善を尽くします。」というものです。今こそ、この基本理念の実践が、求められているのだと感じております。健全な経営を維持しながら、赤十字の理念を具現化する誇れる病院として、地域に貢献して参ります。

地域社会に求められている事を理解しながら誤りなく進んでいく為に、皆様方には、変わらぬ御指導御鞭撻を御願ひし、また、今までの御高配に重ねて感謝を申し上げます、御挨拶とさせていただきます。

御多忙中、また、書面での御報告となり、誠に恐縮では御座いますが、何卒宜しく御審議の程を、御願ひ申し上げます。

令和3年3月16日

院長 紺野 広

上記は、村井達さんに八戸赤十字病院運営審議会会長をお引き受けいただいておりますので、お目通しいただいたものです。村井さんには、この場を借りて失礼な感じもいたしますが、長年にわたり温かいご指導を受けていることに対し感謝を申し述べさせていただきます。「ありがとうございます。これからもよろしくご指導のほど、御願ひ申し上げます」。

運営審議会委員への審議文章郵送後、学校クラスターが発生し、140件くらいのPCR検査をドライブスルーで対応した時には、公道に車があふれかえり交通渋滞を引き起こし、大変な時もあった。

昨日の新型コロナウイルス対応のアピールはこんな感じで、その後から、当院の貧乏自慢を始めた。

平成17年に新病院を建築した後の平成の期間中、たった1度だけ7千万円ほどの黒字を出せたが、その他の年は全て赤字で、15億円に近い赤を出した年もあった。勸奨退職で113名の肩を叩き、人事院勧告よりはるかに少ない月数の期末勤勉手当の支給。経営努力は血のにじむようなものであった。令和に入り、私が院長になってからは、幸い2年連続で黒字となったが、修理保証ができなくなった放射線治療機器を5億円で更新した。2億円の血管造影装置を買う。地権者に迫られ、賃借で使用していた駐車場用地の半分を1億円以上で買い上げる。ガタの来たボイラーを新しくする等の1億円以上の出費が他にも続いた。通帳預金が足りずボーナスを払うための金策に慌てたこともある。このゾッとするエピソードは、日赤院長連盟通信に下記の様に寄稿した。

私の履歴書

八戸赤十字病院 紺野 広

岩手県生まれ 岩手県立盛岡第一高等学校 卒業
平成元年 岩手医科大学 医学部医学科 卒業
平成5年 岩手医科大学 大学院医学研究科（博士課程）卒業
平成10年 岩手医科大学 脳神経外科学講座 助手
平成14年 岩手医科大学 脳神経外科学講座 講師
令和元年4月～ 八戸赤十字病院 院長

他、岩手医科大学：付属病院、高度救命救急センター

岩手県立病院：中央病院、花巻厚生病院、中部病院、北上病院、釜石病院、大船渡病院、千厩病院

赤十字病院：盛岡赤十字病院、富山赤十字病院

JA 秋田厚生連病院：かつの厚生病院、能代厚生医療センター等で勤務

資格：日本脳神経外科学会専門医・指導医、日本脳神経血管内治療学会専門医、日本脳卒中学会専門医・指導医、社会医学系専門医・指導医

家族：妻、長女（12歳：4月から中学1年生となります）

趣味：ゴルフ、アイスホッケー、娘

年頭所感

皆様、新年明けまして御目出とう御座います。良い年初のスタートをきれているでしょうか。さて、新年の話をする前に、昨年を少し振り返ってみたいと思います。

昨年の4月1日、まだ平成の元号が最後を迎える少し前に、私が日本赤十字社本社で近衛忠輝社長より、辞令の交付を受け、同夕には58名の新採用者に対し当院講義室において辞令の交付を行い、新年度、新体制のスタートを切りました。瀬尾名誉院長の後を継いだ際には、当院の経営状況を良く御存知の院外の方からは、「VREのアウトブレイクの問題などで、経営状況の悪化も底を突いたのだろうし、後は右肩上がりで行って行くだけ。良い時期に院長になったね。」と、慰めなのか励ましなのか判然としない御言葉を頂戴した事が御座いました。しかし、院長就任後も、そんな話の通りには進まず、右肩下がりの収支が続き、一時、支払いに対し、病院普通預金が不足する事態が生じました。その時は、なんとかギリギリで借入れが間に合い、なんとか大事には至りませんでした。そんな報告を受けた為、病院の通帳を確認致しましたところ、普通預金残高は、毎月の支払いに必要な最低限の所まで、漸減しておりました。更に、赤字が続けば、3億の病院定期預金に手を付けざるを得ません。それでも赤字の状況が解消されずに続いて行く場合には、負債がまだ70億残っている中、更に借入れを増やしていくと言う事になります。消費税増税、同一労働同一賃金等新たな支出増を伴う課題も、経営を圧迫して行く事になろうかという最中、病院

の経営を改善する為の、一步を踏み出すべき時が来たと判断致しました。『種の起源』の著者として有名な、Charles Darwin は、“It is not the strongest of the species that survives, nor the most intelligent that survives. It is the one that is most adaptable to change.”「生き残る種とは、最も強いものではない。最も知的なものでもない。それは、変化に最もよく適応したものである。」という文章を残しております。私の好きなこの言葉も今回、私の背中を後押ししてくれた様に思います。シンプルで、確実に収益を増やす方法として、2次救急輪番割当の月2回の増を、他の2つの輪番群病院とかけあい獲得し、更に、八戸市、八戸市医師会の子承も得た上で、私から病院の皆に問いました。医局会でも2回、時間を工面して貰い、経営状況を説明し、輪番割り当ての増を御願い致しました。各部署からは概ね賛意を得て、最後の部門、医局医師のアンケート結果を待つ状況でこの原稿を書いております。病院の総意で、前に進んで行ければと願っております。

当医局には、若い医師が多く、総勢66名が在籍しております。若い先生も含め医師の方々一人一人には、「医師以外の病院職員は、パート、臨時、嘱託、正職員を合わせますと、640名を数えます。その他にも、委託の業者が、色々な部署で、働いています。皆さん一人一人が約10名の職員と働く、開業医だったらと、思いを馳せて頂きたいと思います。開業して自立なさる場合、また、勤務医として病院内で主要な役職を担って行く場合、何れにしても、経営に対し目を向け、採算の合う仕事を遂行して行く責任と、リーダーシップが求められます。それぞれの御立場から、病院、職員を、そして患者、患者の家族、地域社会を考えて行動し、医療の一翼を担って頂きたいと思います。皆で進もうと思わなければ、病院は前に進めません。」そう繰り返し、話をしています。当院は、若い月単位の派遣医師が多く、1年の中で全体の1/3-1/2の医局員がいれかわります。そんな彼らに病院に対する愛着を求めても難しい為、病院のライフラインを半日かけて見せ、病院がどれだけ多くの人に支えられて、維持出来ているのかを肌で感じて貰う事で責任を自覚して頂く様に配慮し、また、彼らを理解する様、努めてコミュニケーションを取る事にしております。

最後に、当院血液内科派遣医師、3名から1名への減に伴い、診療の縮小を余儀なくされ、地域医療を支えきれない状況となる見込みでありましたが、武蔵野赤十字病院からの医師派遣により、緩和が必要なターミナルの方、遠方への通院が困難な経済状況、家族環境、ADLの方々を、なんとか診る事が出来ております。2月は、京都から。3月もまた、武蔵野から応援を頂戴する事となっております。本社、医療事業推進本部、院長連盟、応援医師を派遣して頂いている病院に対しましては、感謝しか御座いません。4月以降も、応援が無くては、診療継続は、不可能と思っております。引き続きの御高配、御支援を何卒御願い申し上げます。

私が医師会の会合や、講演会などに参加した際など、他院の医師から、「患者紹介の際に、快く御引き受け頂き、有難う御座います。」と、御礼を言われる事がとても多く、受け入れの際の当院の医師の寛容さと、職責に対し初心を忘れない姿勢は、地域の医療施設の中では群を抜いて高い評価を頂いていると感じます。また、患者さんからも、色々な、職種の方々が、優しい対応や professionalism に関し、感謝の意を表されております。これらは私にとっては無上の喜びであります。これからも、この地で、必要な病院として、愛され続ける様、職員と共に頑張る事を御約束申し上げ、諸兄に対する御礼と新年の御挨拶にかえさせて頂きます。今年も、何卒御指導、御支援の程を、宜しく御願い申し上げます。

これを読み返し、医局員の過半数の賛同を得て、輪番を増やしたことを思い出したが、病院の通帳は見ない方が精神衛生上良いことも思い出してしまった。話を貧乏に戻す。

当期首の長期借入金残高は 40 億で、短期借入金残高は 25 億。自己資本比率は 20%程度で、決して優良な企業とは言えない。

しかし、現在の八戸市の人口は 22 万 4 千人。令和 2 年度の当院入院患者延べ数は 11 万 3,274 人。外来患者延べ数は 14 万 9,238 人。この数字を見て、地域に必要な病院と改めて自覚を持った。メーカーの皆さまには、「有利子負債のない状態で後生に引き渡し、彼らには地域での高度専門医療を継続し、赤十字の使命を果たしていってほしい」という私の夢をお伝えした。

地域における、適正な急性期の病床数に関しては、当院の年報に記載したものがあつた。それを読み起こしても、やはり健全な経営の下、医療を提供し続けていくことの使命を自覚させられる。

<八戸赤十字病院 令和元年度年報>

巻頭言

院長 紺野 広

八戸赤十字病院、令和元年度年報が完成致しました。どうぞ御納め下さい。

平成 28 年度 8 月、青森県地域医療構想調整会議が設置され、平成 28 年度から、令和元年度迄、計 6 回に渡り、県主導で八戸地域 2 次医療圏内の医療提供体制の課題を話し合っただけで済みました。地域毎に調整していく手法により、機能分化している現在の医療制度の中で、適正な機能別病床数へ収束させる事を課題として立ち上げられた制度ですが、青森県の試算では、令和 7 年（2025 年）の八戸地域での急性期医療の必要病床数は、1,122 床です。一方、地域内の各病院から提出された令和 7 年の病床計画に基づくと、急性期病床の合計は 1,798 床となり、此の儘、対策が講じられない場合には、676 床もの急性期病床の過剰が生じる事となります。在宅医療を含む地域包括ケアシステムの構築は、超高齢化社会の到来の中において、必須の懸案事項であり、地域における人的医療資源が頭打ちの現状の中、人的医療資源の確保が診療報酬上に厳格に規定される急性期医療は、適正な病床数まで下げる事が求められて参ります。

令和 2 年度、新型コロナウイルス感染症が流行した為、青森県地域医療構想調整会議は開かれて居りませんが、新型コロナウイルス感染症を人類が制御した後、完全な病床返還では無く、休止病棟を認めた上で、急性期実働病床数には、シーリングが係るものと考えます。所謂 2025 年問題は、コロナウイルス感染症が終熄に向かった後、大きな課題として再認識しなければいけないと考えます。不足する回復期病床、及び、在宅医療の担い手の確保に向け、極々短い期間で、地域全体で議論を進めて、目標に近づけて行く努力をしなければなりません。当年報は、その為の助となり、地域医療構想の討議に資するものであります。地域医療を考えるという観点からも御高覧を賜れば幸いです。

また、年報を見ますと、広く県内外から、受診して頂き、また、療養を受けて頂いている事が分かります。紹介、逆紹介、また、様々な受診動機があろうかと思いますが、地域の様々な方々、及び、地域の医療機関の皆様の御理解の御蔭によるものと、

心より感謝を申し上げます。今後益々の御支援、また地域医療を共に考えて行くにあたり倍旧の御鞭撻を御願ひ申し上げ、年報刊行に際しての挨拶とさせていただきます。

令和2年11月24日

文中に記載した通りで、2025年の八戸地域での急性期医療の必要病床数が1,122床ということを見ると、当院が急性期医療から撤退することはあり得ないことである。

話は貧乏自慢から、メーカーへのお願いに移る。令和2年度の医業費用のうち額の大きなものは、給与費：45億5,647万円、材料費：30億6,286万円であった。いろいろな経営努力でコスト削減を図っているが、下の表のように、材料費中、診療材料費だけが支出増となっていた。

(単位：千円)

医薬品費	2,344,523	→	2,062,192	(△ 282,331	12.0%	減)
診療材料費	908,871	→	923,408	(14,537	1.6%	増)
医療消耗器具 備品費	7,829	→	6,511	(△ 1,318	16.8%	減)
給食材料費	72,182	→	70,747	(△ 1,435	2.0%	減)

総額9億円を超える診療材料費、そしてその総額の増は無視できない。

赤十字病院のベンチマークと比較すると、当院では74%の診療材料が全赤十字病院の平均を超える額で購入されていた。保険償還される診療材料に限っても、全国の赤十字病院の中で70番目と償還原価率が高い部類に属していた。病院への納入価格は、結局は卸し、ディーラーが決める。メーカー、ディーラーのどちらに話すか一時迷った。実際、価格交渉はディーラーとしてくれとの理由で、昨日は参加しなかったメーカーもあった。しかし、メーカーに最初にアクションを起こすことが、価格交渉において必要と考え、同じ製品を安価で購入している他の赤十字病院のデータを、あらかじめお渡しした上で昨日を迎え、話を聞いていただいた。

国民皆保険の中、病院の医療行為に対する保険点数、メーカー診療材料の償還設定はかなり低く抑えられている。医薬品に関しても同じである。国民皆保険は世界に誇る施策ではあるが、日本の医系企業全体の体力を奪う施策でもある。ワクチン開発の他国からの遅れは、みじめとしか言いようがない。

苦しいのは、メーカー、病院、どれも同じである。当院からは、院内スペースの在庫管理のための供与、新規の対抗製品が出て臨床に充分資するにも関わらず、だぶついているものや滅菌期限が迫っているものの積極的な購入等を提案。赤十字病院群や近隣の病院との共同購入によるスケールメリットを提示した。

昔から東北地方は遠距離輸送となるため、納入価格高騰はやむなしとメーカー側から説明されてきたが、今回の当院からの提案に対し、一考し何らかの対応を取ってくれることを期待している。

今まで国内・海外のいろんな医療機器製造の工場を見てきた。必ず手作業が加わる。人件費は馬鹿にならない。先に述べた、国内と国外企業の開発資金力の差で、医療機器・医療材料は輸入品がほとんどである。日本のメーカーの多くは、代理店でし

かないのが実情である。医療行政の無策ぶりには腹が立つが、メーカーに同情してばかりではいけない。

委託を含めると、当院で働く方々は約 1,000 人。2 次医療圏の対象人口は 35 万人である。メーカー側には、長きに渡り Win-Win の関係が築けるよう、互いに努力しませんかと呼び掛けさせていただいた。

前回のロータリークラブレターにファンベースという内容で寄稿をした。転勤となった野村證券の田部久貴さんに教えていただいたことである。私の話で、メーカーの方々がすぐに病院のファンになってくれると楽観している訳ではないが、ファンベースの思想は私の仕事の仕方、生き方を少し変えてくれるものであったと感じている。

結局は長い寄稿になった。八戸赤十字病院を知ってもらい、ファンになってほしい卑しい心がそうさせたようだ。何とぞご容赦のほどを。

ファンベースの考えの他に、ロータリーの親睦・奉仕の理念、四つのテスト等にも影響を受けてきた気がする。今回の話が病院側からの一方的な依頼で終わらなかったのは、ロータリーに勉強させてもらったおかげであるように思う。

思い返せば、熊谷清一さんは「調停・裁判に赴く時、調停等が終わった時に、勝ち負けにかかわらず、両者が共に再スタートを切れることを大事に考えている」とおっしゃっていた。橋本昭一さんも「自分だけってのは、駄目なんだ」と時々諭していただいた。どれも心に残る、私の人生の糧となる金言である。本当にありがとうございます。ほうけるまで大事にします。

勤務が終わってから書いたので、お腹がすいた。

「皆さん、ご協力ありがとうございました」

広瀬 知明

巻頭の道尻会長のご寄稿で「孤軍奮闘奉仕活動を継続された」とおほめの言葉を頂戴しましたが、会長、孤軍奮闘ではございません。

会報を途絶えることなく発行できたのは、コロナ禍の中で徹底した感染防止対策を講じ、正しく恐れて例会を継続していただいたからこそ。奉仕活動でも取材できないときは出席された方からメモと写真を頂いて公式サイトに記事をアップできました。65 周年記念誌の編集は多くの方からご協力頂きましたし、クラブレターは年 2 回の発行という無謀な挑戦にもかかわらず、これまた大勢の方からご協力を頂戴しました。

会報・広報委員長を何とか務め上げることができたのは八戸ロータリークラブの全ての会員皆さま、事務局の山田様、協同印刷様のおかげです。ここに厚く御礼を申し上げます。

さて、小井田年度は夏川戸さんから「ロータリーの友」委員長を引き継ぐことになりました。これまた会員皆さまのご協力なしでは委員会を運営することができません。7 月以降も引き続きご協力のほど、よろしく願いいたします。